

国際化に対応した日本人育成

時代は「国際化」です。最近では高校や大学の学科などのアピールによく使われる文句となっているようです。ただ「国際人を育てる」「国際社会に通用する人材の育成」などと言われ続けると、まるで国内に残って仕事をするのは敗者であるかのような誤解さえ受けかねません。

さて、この「国際化」というものの中身ですが、どうも短期の語学研修（英語圏への）やオールラウンド重視の設備・人員整備にばかり向いているような気がします。

「英語が話せる」＝「国際社会に通用する人」と考えるのは間違いです。

もしそうならば、現在の英語圏で生活する人はほぼすべてが「国際社会に通用する人材」と言うことになってしまいます。アメリカの幼稚園児が英語で話すのを聞いて、「まあこの子はこれほど幼いのに英語を自由に話せるなんて国際人だね。」などという人はいないでしょう。

あくまでも「国際社会に通用する人材」というのは、何よりもその人がもつ知識・技能・才能が優秀であることが必要不可欠なのであり、語学が堪能であることなどはあくまでも付随的な要素にすぎないと思います。イチロー、中田英寿、佐藤琢磨と現在も海外で活躍する日本人はいますが、彼らが世界に出かけられたのは、やはり本業の技能が優れていたからであり、現在彼らが流暢に現地の言葉を使うのは、その国に入ってからその彼らの努力の結果であり、それが自らの力を最大限に発揮するための手段として必要であるから身につけたはずなのです。

その意味では研究であれ、営業・経営・経理とあらゆる分野における「国際的に通用する人材」は存在するはずで、その人はまちがいなく国内でも一流であるはずで。

もう一点、上にもあえて書きましたが「国際人」なる人種・民族はいません。むしろ私たちはこの国を出れば、否応なく「日本人」であることを意識せざるをえません。いくら本人が無国籍人のように振舞おうとも、他国の方にとって我々はやはり日本人であり、少なからず日本を背負うことになります。しかしこのことは決して悪いことではありません。そこで異なった民族文化の交流により相互理解が生まれるからです。でも、ここでその日本人が自分の国の歴史・文化・風土をほとんど語れなかったとしたらどうでしょう。はたして相手の外国人から見て魅力ある人物にうつるでしょうか。「自国のみにとらわれていない、国際的な視野に立った方だ」と賞賛されるより、「根無し草の棄国者なのか」と蔑まされるのがおちでしょう。

最近塾で百人一首や古典の音読をはじめました。これは当塾なりに考えた、国際的な日本人をどう育てるかという課題に対するひとつの試みです。

今後中学クラスの理社国の授業や
来年度開講予定の小学生国語作文クラスなどにこうした考え方を取り入れて
いこうと思います。

2学期中間テスト結果

高森台中	英語	数学	国語	社会	理科	合計
中 塾生	90.0	92.6	88.4	88.0	82.9	442
3 学年	69.1	65.6	74.3	69.9	57.4	339
中 塾生	97.7	89.4	72.9	69.1	71.3	400
1 学年	72.2	63.6	55.9	45.6	50.6	288

（右表：中2高森は少人数のため割愛）